



だっこするよ

令和5年2月

社会福祉法人茂原高師保育園
北区立赤羽台保育園

園長 奥戸 昌子

一生モノが育つ保育とは… 子どもは生まれながらに人間の尊さを持っている

三寒四温の言葉通り、寒さと温かさを繰り返しながらもうすぐ立春を迎えます。この時期、水仙がそこここに咲いて清々しい香りを放っています。

今年度も2か月を残すばかりとなり、どのクラスもまとまりの時期を迎えて、0、1歳さんも友達と目を合わせて積極的に自分のやりたいことを見つけて遊んでいます。友達の欲しい遊具を渡してあげたり、転んでもすぐに起き上がり、パップッと手の泥をはたくなど…皆逞しく育っています。

1月に3回異年齢交流会を行いました。6つのおうちに分かれての交流会、私たちの想像以上に子どもたちはよく遊びました。それぞれに自分のやりたい遊びに入り、そこでどンドン広げ充実した時間でした。3回目、5歳児が始めた汽車レールをどンドンつないで、おひさま組から廊下へと線路を延ばし延ばして、周りにいた子ども加わりながら、最後大人も集まり測ると片道18メートルまで…遊びは無限ですね。また、5歳児のマフラ編みを4歳児が興味を持ち、編み始めました。保育園という社会で、異年齢保育は、一緒に考える、助け合う、育ち合う体験であり、豊かな人間関係の土台を作っていくものだと信じています。尚、異年齢保育への移行にはご不安な保護者の方もいらっしゃると思います。子どもたちの安全と安心を最優先に考慮して進めて参ります。どうぞ宜しくお願いします。

保育の質を考え合うシンポジウム「一生モノが育つ保育ってあるのかな…」佐伯胖氏（公益社団法人信濃教育研究所所長・東京大学名誉教授・認知心理学の第一人者）井桁容子氏（非営利団体コドモノミカタ代表理事NHK すくすく子育てにも多く出演）のシンポジウムに参加しました。「子ども」をどのようにとらえるか、ウィズコロナ、ブーカの時代と言われ、人間が予測不能な時代に入ったと言われている。大人たちが経験の無い社会を子どもたちは生きていく。井桁先生からの「一生モノは、子どもが生まれながらにもっていて、いろんな場面で「人間とはこうだ」と教えてくれている。子どもの行為から表出しているものを、私たちは、受け止めて日々の保育をしているだろうか。子どもの中の一生モノを信頼していく。保育士が、子どもを個と見ず、集団と見がちなのは、子どもを上手くコントロールしなければ自分の能力が評価されるという生存OSが働くからだ。自分が生き残るために脳が、見栄えや効率を優先してしまう。人間の感性を持ち、大人は子どもから学ばなければならない。コルチャック氏の言葉「子どもはだんだんと人間になるのではなく、すでに人間である」と。

佐伯先生の「新生児室で赤ちゃんがもらい泣きをする。自分の泣き声を聞かせても泣かないが、他の子の泣き声を聞いて、それを知らせるために泣く。母親が抱えようとするすると背を伸ばし、背中に隙間をつくるなど相手への配慮をする。すでに発表されている新生児の能力だ。保育士や教師は、教える、教えられるという関係ではなく、共同探究者である。その子が持っている目的に向かって一緒に探究していく…正解を見つけるのではなく、教育とは知りたいことを探究する旅に出るようなものである。そして、三人称的になることが知的と錯覚している。今の大人がそのように育てられているのではないか。自分の中の三人称性、冷静に客観的に受け止めることが良いと思うことはやめなければならない。その子がどう感じているのか、「感情」というスイッチに替えるのは「闘い」だ。教育は大きく変わってきている。子どもが全身で発信している思いを受け止める訓練が必要である」と。今、私たちに大切なのは、技術ではなく、とてもシンプルな「感じる」「共鳴」することだと学びました。子どもへの暖かく力強い言葉に心震える時間でした。写真は、遊びを創る達人たちです。